

## 「マルタとマリア」(ルカによる福音書一〇章三八〜四二節)

### 1 マルタとマリア

マルタとマリア、新約聖書で一番有名な姉妹と言ってよいと思います。マルタが姉でマリアは妹です。

この二人について、今日の箇所は短いので、イエスのもてなしを巡って少ししか書いてありません。マタイとマルコにはもともと出てきません。しかしヨハネによる福音書にはこの姉妹について、姉妹の弟ラザロのこともふくめ、一章以上を費やし、詳しく書かれています(一一・一〜一二・一一)。

それによると彼女たちが住んでいたのはベタニアというところでした。都エルサレムの近くの村、エルサレムに入る街道筋に当たります。ルカの今日の箇所には、場所の言及はありません。

この二人の姉妹、聖書では、イエスをメシア(キリスト)として信じ、応援していた人として描かれています。十二弟子のようにイエスと日夜行動を共にしていたわけではありませんが、村での日々の生活の中で、よい働きをしていた女性たちという印象です。

ヨハネによる福音書には、病死した弟ラザロが、死んで四日もたち埋葬されていたラザロが、イエスによって甦らされる、こうした奇跡を彼女たちが経験したことが伝えられています。

しかしヨハネのその詳しい記事の中に、今日の私どもの聖書箇所が記しているような姉と妹の関係、とくに姉マルタの心の葛藤、それをイエスに訴えたことなど出てきません。ただそれに通じるような記述があります。例えばラザロが死んで、四日もたつてイエスが姉妹の家にやって来たときです。二人のことがこう書かれています。

マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行つたが、マリアは家の中に座っていた(一一・二〇)。

この後マリアは、イエスが呼んでいると聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行きます。そのときのマリアの様子です。

家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が泣きに行くのだろうと思ひ、後を追つた。マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し・・・(一一・三二〜三三)。

その他、ヨハネによる福音書には、イエスを再び迎えたときのマルタについてのこういう言葉もあります。「イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた」(一二・一〜二)。

マルタは、いわば動、マリアは静、そんな人間のイメージを、ヨハネ、ルカ、両福

音書とも私どもにいだかせるものです。

今日のこの箇所、マルタとマリア、いろんな解釈がなされ、私どもの受け取り方もさまざまな箇所です。

例えばいま「動と静」と言いましたが、これを「活動的な人間と瞑想的な人間」と呼んで、イエスが求めている、賞賛しているのは後者、瞑想的なタイプの人間だ、そういう理解がしばしばなされてきたところです。

じつさいキリスト教の影響を受けた西欧の人間理解には、瞑想的な人間の在り方を見るところという伝統があります。活動的な側面、これは、働く生活といってもいいと思いますが、人間が目ざすべき生き方は、働く生活、労働ではなく、神を瞑想する生活だということです。そして今日の箇所は、そうしたことを私どもに確認させる箇所というわけです。

## 2 マルタのいらだち

さてそこで今日の箇所、ルカによる福音書のマルタとマリア、ヨハネの書いている話から見ればそのごく一部、一局面を切り取ったような箇所、もう少し詳しく見て考えてみたいと思います。

一行が歩いて行くうちに、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた・・・(二八〇節前半)。

「ある村」、申し上げたように、ベタニアです。「マリアという姉妹」、これも申し上げたように、妹です。

イエスとその一行は、そこにはじめて来たわけではありません。伝道旅行の途中の彼らをマルタは迎え入れます。彼女は、いわばホストをつとめます。「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働」くは当然です。ルカのこの箇所も、彼女がイエスの一行を迎え入れて、もてなしのために一生懸命つとめていることを、少しも批判的には見ていません。

ただマルタにおいてそれが、やがてイエスに向かっても不満を言うことになったのは、妹のマリアとの関係においてです。

マリアは、姉のマルタが一生懸命働いていたのに対して、すぐイエスのところに行き、足もとに座って、イエスの語ることに耳を傾けています。「その話に聞き入っていた」とありますが、「話」はむしろ「言葉」と言ったほうがよいと思います。話が面白いからというのではなくて主の言葉に、神の言葉に聞き入っていたのです。(性格)というようなことも、先ほどのヨハネの福音書などから読み取れば、なかったとは言えません。

いずれにせよ、マルタは、気になってしょうがない。私どもも、こうしたことは大なり小なり経験するものです。

妹が手伝うこともせず、座って聞き入っている。その姿に、マルタはイライラしています。妹は、そうやってよく勉強したらいい、イエス様の言うことをよく聞いた方がいい、そのように余裕をもって見られればいいのですが、私どもそのようにはなかなかありません。一つは、マルタが、じつは自分も、マリアのように、座って聞き入りたいと思っていたからです。自分がしたいのにできない、他人はやっている、そのとき人は、やっている人に文句を言い、それを禁止する、禁止してもらおうような行動に出るものです。そういう気持ちだが、ここでマルタの中に芽生えた、そのようにも思われます。

マルタは・・・そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。「わたしを」手伝ってくれるようにおっしゃってください」(四〇節)。

「そばに近寄って」とは、イエスのそばに近寄って、あるいはそばに立って、という意味です。密かに、というよりは、大っぴらに、マリアも弟子たちもいるその前に出て行ってこう言ったということでしょうか(?)。

マルタは、妹マリアに不満をもっていただけではありませんでした。イエスにも不満をもっていたので。

自分を手伝おうともしないマリア、そのマリア相手に、彼女が聞いているからといって喜んで語っているイエス、そのイエスは、そうやって自分に対して不正をおこなっているということです。

マルタの不平の言葉に一つの特徴があります。それは、「わたし」です。マルタの言葉の中で三回使われています。主イエスのもてなしであれ、イエス以外の人のもてなしであれ、本来は、そうしていること、あるいはそれにあずかっている、そのことに「わたし」の働きの意味も、「わたし」の存在の意味もあるはずなのに、そうでないところに、マルタが、あれこれと気配りし、こころを乱している様子がうかがわれます。どうしたらよいのでしょうか。

### 3 御言葉に聞く

イエスは、こう答えています。

主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことにも思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」(四一〜四二節)。

一見すると、マルタが叱られているようにも見えますが、「マルタ、マルタ」と名前をくり返しているところに、まずもって、イエスの深い愛情を、私ども感じとるべきです。

じつさいヨハネによる福音書を見ると、マルタは、イエスを「神の子、メシア」(一

一・二七)と信じていますと、使徒ペトロと並ぶ見事な信仰の告白をしています。しかしそのマルタも、イエスをもてなそうとして、ここを乱したのです。それは人間としてありうることで、それ自身問題なことではありません。むしろここでこそ、彼女は、自らの信仰の原点に目を注ぐべきなのです。それは、妹のマリアにおいて具現されていた原点です。

そしてそれはここで、イエスによって、ただ一つ必要なこととされています。それは、イエスの言葉に、すなわち、主の言葉、神の言葉に聞くことです。そこから始める。始めたところから始めることです。

今日は、最初のところで、マルタとマリア、この姉妹のこと、その家庭のこと、ヨハネにはかなり詳しく書いてあるのに、ルカには、その一場面しか書かれていないという感想を申し上げます。これは私の見方ですが、前の箇所の良いサマリア人の譬えとのつながりで読むことが求められている、じつはマルタとマリアも一つの譬えなのです(Ｊ・グリーン)。

今日の箇所の直前、良いサマリア人の譬えの最後の言葉は、「あなたも同じようにしなさい」(三七節)でした。「すること」の勧め、行為への命令で前の箇所は終わっています。

その通り、すればよいのですけれど、しかしそれだけでは、私ども間違ってしまうことになりはしないでしょうか。イエスの神の国の宣教を受けて、それを受けとめるということとは、そのまま、あわてて、実践へと、行為へと、駆け出していくことではないはずです。そうです。神の言葉に聞くことです。マリアのように、イエスの膝元まで近寄って聞くこと、耳を傾けること、それを抜きにしては、行いも、よいものとはならないのです。律法学者は、聞いたけど、行おうともしませんでした。ちゃんと聞いていないからです。善いサマリア人は、サマリア人であるにもかかわらず、神の言葉に聞いて、行ったのです。

御言葉に聞くこと、それはこれで十分ということには決してならない。つねに、新しく聞く、聞きつづける、それが神の言葉を聞くことです。ルカによる福音書は、使徒言行録もふくめて、聞いて行うことを、弟子たることの条件と考えています。聖書を一つだけ引用しておきます。「良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」(八・一六。六・四七、一一・二八他)。これがイエスを信じ従う弟子の在り方なのです。

マルタとマリアとは一つの譬えではないかと申しましたが、それは、神の言葉を聞く人の譬えです。とくにマリアは、弟子である者たちの、教会の、従って私どもの在り方を暗示しているのです。

神の言葉に聞くということで、改めて私どもは今日一〇月三十一日が宗教改革記念日であることを思い起こします。教会一致(エキュメニズム)が目ざされている現代こそ、聖書を教会に取り戻した、神の言葉に聞こうとした宗教改革の精神が、プロテストタント、カトリック、教派を越えて、共通の遺産として受け継がれ、大切にされていくべきではないかと思えます。今日の箇所からも、御言葉に聞くことの重要性を、私ども強く感じとるものです。